

に数少い珍らしいもの一つにありました。城内の御殿は丹波篠山城にも残っていましたが、惜しくも昭和十九年失火で焼失し、大阪城も名古屋城の御殿も戦災で焼け、今は京都の二條城や武蔵川越城などに見られるに過ぎないからです。ここの御殿は今、公会堂に使われていました。云々

と見聞を記してはいますが、行きずりの旅行者に注目される文化財を、地元が何の関心を示さないというのはおかしな事です。

將來は国の重要文化財に指定される価値が十分にある建物です。佐伯市の観光資源としても、ぜひ保存していただきたいと思っております。

(終)

報告

西谷の武家長屋門が動く

— 先ず取壊しからは救われるが —

会員 羽 柴 弘

遠からず取り壊しの運命に迫りこまれていた西谷の武家長屋門、通勤の途上その軒下を自転車で毎日通っている私は、数日前から曳移転の工事をはじめつたのを見てとった。丈夫な支柱が立てられ、ジャッキが何台も用意されている。今日(十月九日)はもう何程か上げられて鉄製のコンクリートが敷きこまれている。

学校からの帰りにふと見ると、長屋門の前に持主の佐藤勇氏が立って居られる。私は自転車をとめて立ち寄り挨拶してお話をうかがう。

はじめ佐伯市の誇りに足る文化財として、市で買収し

三ノ丸下かどこかに移築して、いつまでも保存してほという事で検討がいつけられたが、移築の費用が莫大にかかり、移築先の事情も今急にとりわけにいかず、市はとうとう断念せざるを得なくなつたようである。外にも買手はなかなかたらしく、早晚取り壊しの運命——と私はあきらめていたのだが、持主の佐藤氏は一般市民の声に忖えて、取り敢えず広くない敷地にずらしこむ方法をとられたという。

先ず主家をずらして真に入札、その跡に長屋門をと考えたが門の開口が広いので門から左の長屋部分と切りはなして、という筋余の策をとられたという。当分いささか不格好であるが、所有地一ぱいに一応おさめて、次の機会、道路拡張工事へはじまるまでに、移築先(買手)を得ようというわけである。

佐藤氏と共に私は長大な長屋門を見上げながら、いろいろお話を聞かす。土台はかなりいたんでいて殆んど取り替へなければならぬが、天保十四年家老藏齋藤家の表門として新築、既に百三十年代とたっているがまことに頑丈、ほとんどいぢみがないという。

門の扉は檜(ひやき)の部厚い一枚板、金具も大きく丈夫で、三ノ丸の櫓門のそれをはるかに凌ぐほど立派、これを建てた立派な文化財である。

そのうち出来るのである。三ノ丸下の図書館あたり入口の門にでも出さないものか。或はどなたか篤志家が引きとつて移築し、いつまでも旧藩政時代の武家長屋門の面影を伝えてもらえないものか。いすれにしてもこの二三日のうち長屋門は動いての上はらく時を待つて出るのか、本当によい引越先に落ちついてその庭園をいつまでも私どもに見せてほしいと念ずるものである。

(以上)